

人文研所蔵16mmフィルムとそのデジタル化

安岡孝一*

はじめに

2008年春のこと、引越作業中の京都大学人文科学研究所で、7 $\frac{1}{4}$ inch 径ブリキ缶に入った16mmフィルム4巻が発見された。いずれの巻も400feet程度だと思われたが、保存状態が極めて悪く、フィルム同士が癒着して、取り出そうとするとポロポロと崩れていくという有様だった。とても映写機にかかる状態ではなく、一旦は廃棄を考えたが、缶の一つに書かれた「昭和十三年 雲岡石窟」の文字がどうにも気になる。ダメモトでIMAGICA ウェストに相談してみたところ、まずフィルムそのもののクリーニングをおこなった後、リールにかかる部分はそのまま回してデジタル化し、それが難しい部分はコマを一枚ずつデジタル化する、という手法で何とかできるのではないか、とのことだった。



*京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター

1年の後、約15分のMPEGファイルが4本、IMAGICA ウェストから納入された。筆者ひとりでは内容がさっぱりわからなかったことから、東アジア人文情報学研究センターの安藤房枝と向井佑介、および人文科学研究所の菊地暁に助力を願い、フィルムに写っている内容の解明を進めた。その結果、これら4巻のフィルムは、1934年と1936年に撮影されたものがそれぞれ1巻ずつ、1938年に撮影されたものが2巻で、撮影地はいずれも中国北部であることが判明した。すなわち、東方文化学院京都研究所および東方文化研究所が撮影したフィルムだったわけである。以下にその詳細を述べる。

1 北支遊記 (1934年・白黒16mmサイレント・15分)



冒頭タイトルに「北支遊記」「昭和九年初秋」「撮影 長廣敏雄」とあることから、1934年の撮影であることがわかる。撮影者の長廣敏雄は、東方文化学院京都研究所の研究員。撮影場所は、北京(当時は北平)市内の北海公園・正陽門・故宮・観象台、北京郊外の頤和園仏香閣・香山・明十三陵・房山雲居寺、および山西省大同の雲岡寺など。挿入されている字幕は以下のとおり。

- 00:02 「北支遊記」「昭和九年初秋」「撮影 長廣敏雄」
- 00:11 「一行」「東方文化學院」「京都研究所」「塚本、能田、」「小川、森、長廣」「各研究員」
- 00:20 「北平市井風景」
- 05:49 「故宮歴史博物館」「——午門」
- 06:18 「観象臺」「於北平東南城壁」
- 07:00 「北平西郊」「万壽山」「玉泉山」「香山周遊」
- 09:03 「明十三陵」

- 10:31 「房山雲居寺」「小西天行」
10:59 「雨を冒して」「小西天へ」
11:47 「西域雲居禪林」
12:55 「山西大同及び」「雲崗寺への旅」
15:04 「完」
15:08 Agfa のロゴ

『遊支日記』[†]の記述と比較すると、「北支遊記」は1934年8月30日～9月17日に撮影されたことがわかる。ただし『遊支日記』によれば、一行は観象台(9月1日)→故宮歴史博物館(9月1日)→房山雲居寺(9月2日～4日)→玉泉山(9月9日)→明十三陵(9月13日)→大同(9月16日)の順序で各地を回っているが、フィルムの順序は故宮歴史博物館→観象台→玉泉山→明十三陵→房山雲居寺→大同と全く異なっている。記録映画にしては、かなり大胆な編集が加えられているように思われる。

この「北支遊記」は、5秒以下の短いカットを次々につなぎ合わせる形で構成されており、記録映画としては非常に気ぜわしい作品になっている。逆光で撮影してしまっているシーンも多く、ゼンマイ式カメラによる16mmフィルムの撮影に、長廣がまだ不慣れだったのではないかと感じられる。

2 響堂山と龍門(1936年・白黒16mmサイレント・残存16分)



南響堂山を登るシーンから唐突に始まり、龍門石窟のシーンの途中で唐突に終わる。撮影場所は、南響堂山・磁県彭城鎮・北響堂山、および洛陽の龍門石窟。挿入されている字幕は以下のとおり。

[†]東方學報, 第5冊副刊, 1935年5月, pp.431-440.

- +04:20 「彭城鎮ハ磁州窯ノ」「本場デアル」
- +08:03 「河南省武安縣」「北響堂山行」「一四月十六日—」
- +08:12 「彭城鎮北方四十支里」
- +13:04 「河北省洛陽縣」「龍門踏査」「一四月二十四日—」
- +13:49 「賓陽洞佛像」「(北魏)」
- +15:16 「老君洞内」「拓工作業」

北響堂山に4月16日、龍門に4月24日という日付は、『北支史蹟調査旅行日記』[‡]の記述と一致することから、このフィルムは1936年4月9日～29日に撮影されたものだと考えられる。また、このフィルムは、1936年6月6日の東方文化学院京都研究所談話会において、上映されたという記録[§]が残っている。

六月例会(六日)北支旅行に同行した羽館囑託員の撮影になる寫眞及び別に蒐集の拓影等を供覽し、次の講演があつた。終つて長廣研究員撮影の十六ミリ「響堂山と龍門」を映寫した。此の會は公開し、來聽者七十名に近く、盛會であつた。

この記録から、フィルムのタイトルは「響堂山と龍門」であり、撮影者は長廣敏雄であることがわかる。ただし、フィルム中に長廣が写っているシーンが認められることから、同行した水野清一・羽館易か、あるいは他の誰かが撮影した部分もあるということになる。

ちなみに、水野が長廣に宛てた1938年4月5日付の手紙[¶]の中に、1936年の16mmフィルムに言及した部分がある。

長廣敏雄様

玄海では少しゆられました、海上至極平穩無事、例の如くデッキゴルフに日をつぶしました。いま廟島列島の間を通過して渤海に入りつつあります。油を流したやうな静けさ、明朝は塘沽(タンクー)入り、直ちに北京に向かひます。塘沽入りの十六ミリの光景を思い起こしました(前々年、彼らと私とは十六ミリ・カメラをたずさえ、南北響堂山、龍門の調査に行った。そのことをいう)。のこりの英文レジュメ(当時、彼と私は共著『龍門石窟の研究』の原稿執筆中であつた)今日午後ゴルフを休んで認めました。海上平穩のさま御想像下さい。別封にて御送付いたしますからよろしく願ひいたします。玄海通過の夜は度々貴兄が同室にゐるやうな錯覚を起しました。御健康を祈ります。敬具
水野清一/羽館易

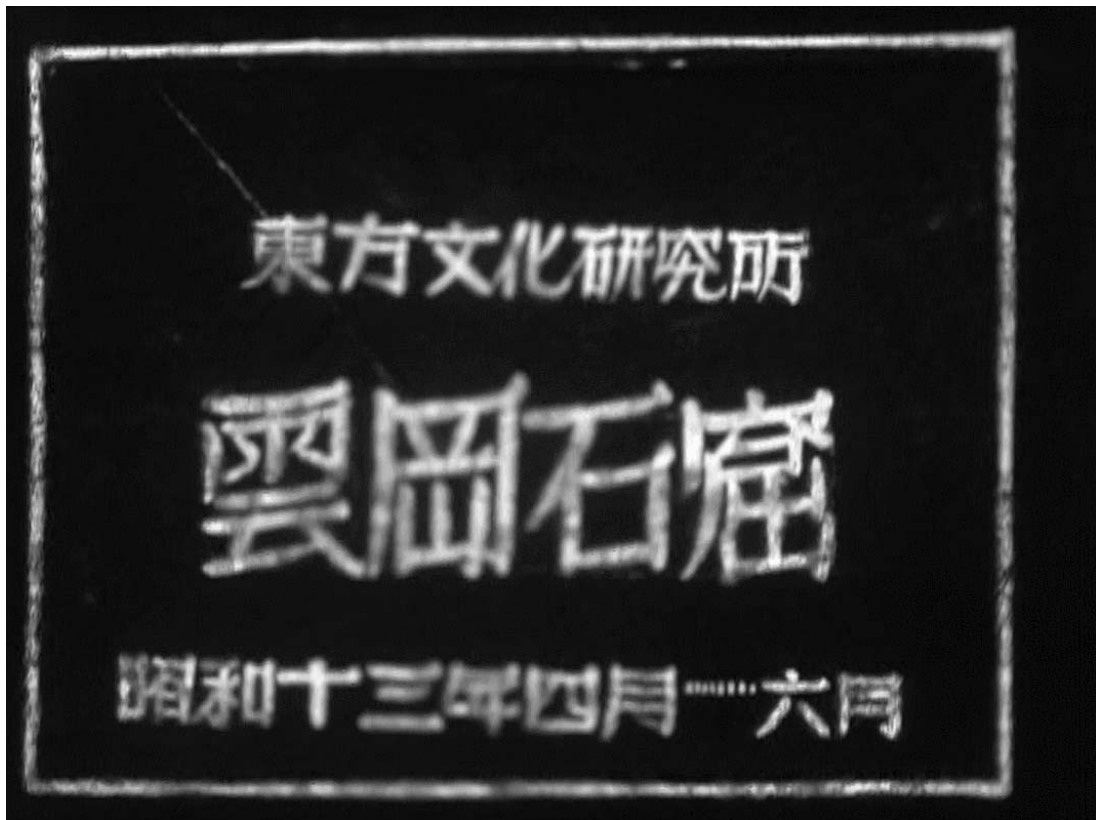
この手紙によれば、1936年撮影の16mmフィルムには、塘沽が写っているはずである。しかし、我々が発見したフィルムには、塘沽の映像は含まれていない。この事実と『北支史蹟調査旅行日記』の記述とを考え合わせると、「響堂山と龍門」は元々3巻組(あるいはそれ以上)のフィルムであり、その前巻部分に塘沽の映像を含んでいたのだという結論になる。また、今回発見された16分のフィルムは、タイトルもエンドタイトルもないことから、「響堂山と龍門」の中巻部分だと考えられる。

[‡]東方學報, 第7冊, 1936年12月, pp.386-394.

[§]東方學報, 第7冊, 1936年12月, p.404.

[¶]長廣敏雄: 雲岡日記, NHK ブックス 544, 1988年2月, p.204.

3 雲岡石窟 (1938年・白黒16mmサイレント・35分)



残る2本のフィルムのうち1本は、冒頭に「東方文化研究所」「雲岡石窟」「昭和十三年四月—六月」とタイトルがある。もう1本は末尾に「完了」というエンドタイトルがあり、しかも内容的にはこれらは完全につながっていることから、35分フィルムの前巻・後巻だと考えられる。撮影者の水野清一は、東方文化研究所の嘱託員。撮影場所は、北京～張家口～天鎮～大同の鉄道風景、山西省大同の下華嚴寺・上華嚴寺・市街地・城壁南門・南善化寺、大同郊外の観音閣・雲岡寺など。そして、雲岡石窟およびその周辺の映像が、作品の後半を占める。挿入されている字幕は以下のとおり。

- 00:02 「東方文化研究所」「雲岡石窟」「昭和十三年四月—六月」
- 00:09 「一行」「水野清一」「羽館易」「小野勝年」「米田太三郎」「徐立信」
- 00:15 「撮影」「水野清一」
- 00:18 「四月九日—」「北京出発」「——正陽門車站」
- 01:27 「南口の谷」「—李花開く」
- 02:18 「朔北の曠野を行く」「—鷄鳴山—宣化—」
- 02:39 北京～青龍橋～張家口～天鎮～陽高～大同の鉄道略図
- 02:50 「四月十一日—」「カルガン」「即ち張家口」
- 03:25 「胸につけた良民票」「昨年苦々しい戦闘の迹」「を偲ばしめる」「—天鎮」
- 03:40 「車窓瞥見」
- 04:28 「晋北の高原に」「春は未だし」「雲の山—木の芽は堅い—毛皮」
- 05:03 「北京より383キロ」「大同車站に入る」
- 05:25 「我々は荷物と一緒に」「大同に到着した」
- 05:28 「晋北政府」「民生顧問 岩崎継生氏」「警務顧問 森一郎氏」「に迎へられて」

- 06:32 「四月十二日」「下華嚴寺」
07:01 「上華嚴寺」
08:54 「街頭所見」
12:04 「南門にて」「大同城内を望む」
12:53 「南寺こと」「南善化寺」
13:04 「雲岡途上の」「観音閣」
13:48 「雲岡」「石佛は保護されてゐる」「—雲岡鎮警備隊」
17:07 「我々の」「雲岡生活は始つた」「四月十三日から」「六月十六日に至る」
22:41 「雲岡の朝——」「臺上の衛兵」「—我々も護られてゐる」
23:40 「雲岡にも春が来て」「堆肥を運び——」「畑を鋤く」
24:40 「晋北の宝」「大同炭を運ぶ」「—原始的な運搬法で、宝は」「まだ死藏されてゐる」
25:26 「我々の 写真撮影」「屋根から—足場から」「羽箆易」「米田太三郎」
27:55 「雲岡参道の修理に」「工兵隊の活動」「—五月十五日」
28:19 「春深し！」「馬鈴薯を植ゑる」
30:05 「我々の」「拓本作業」「—拓工徐君」
30:17 「討伐隊は行く」「—四月二十五日」
31:50 「夏来る！」「緑陰に集る牧羊」「—第三・第四洞前」
33:16 「我々の」「発掘作業は進む」「小野勝年」
34:41 「芍薬老了」「調査終了」「水野清一」「六月十五日」
35:04 「完了」

『雲岡石窟調査記』*の記述と比較すると、このフィルム「雲岡石窟」は1938年4月9日～6月15日に撮影されたことがわかる。ただし、字幕にもあるとおり、フィルムの順序は日付順にはなっておらず、4月25日に撮影された部分が途中に挿入される形になっている。

おわりに

2009年10月28日～11月1日に京都大学総合博物館で開催された「映像と写真で見る東洋学」において、これら3本のフィルムを全て一般公開[†]した。70年ぶりに日の目を見た、と言っても過言ではないだろう。また、これら3本のフィルムをインターネットで配信すべく、筆者は現在、京都大学デジタルアーカイブにおいて作業中である。ただ、これらのフィルムを単純に公開しただけでは、見る人には何が写っているのかさっぱりわからない、というのもまた事実である。どのような情報を付加すればよいのか、読者の知恵をぜひお借りしたい。

*東方學報, 第9冊, 1938年10月, pp.315-345.

[†]ただし1936年撮影のフィルムは、この時点ではタイトルが判明していなかったため、仮タイトルを「北支史蹟調査旅行」として公開した。